

緑の風 FAX版

NO. 47
2016年2月26日
JR東労組
本部情宣部

JR東労組の「防災・減災の取り組み」が

防災士と共に災害に強い鉄道と職場をつくろう！



防災士の組合員で大川小学校を訪れ、現地踏査を行う



仙石線陸前浜田駅付近の高台の現地踏査

道路から線路を見て、避難・誘導路を歩く「現地踏査」を積み重ねる

その後、運転士・車掌職場では乗務している線区の現地踏査を取り組みました。営業職場では駅構内の乗客の安全確保について、工務職場では作業員の安全確保と復旧体制について、バス職場では職場の津波避難について調査しました。また、現地踏査や調査の際には沿線自治体を訪問して、防災担当

者から話を聞いてきました。「現地踏査」とは、乗務しているだけでは分からない線路の地形や高低差、線路がどういったところを走っているのか、線路からの脱出口、沿線の高台や退避場所などを実際に道路から見て歩いて確かめる取り組みです。道路から線路を見ることが、高台への避難が困難な場所、崖崩れの危険性の高い線路、海が見えなくても線路に津波が押し寄せる線路が多

くあること、首都圏では線路脇に柵が設置されているため線路外への脱出が容易ではないこと、ラッシュ時には多くの乗客（2、3000人）の避難が必要なこと、山沿いの線路は救助に時間を要する箇所が多いこと、避難路の看板が整備されていないなど、路線や区間毎に様々な問題点が明らかになりました。

また、自治体によって避難を案内する看板の表記が異なり、駅間に停車した場合の旅客の避難誘導についても、地域との相互理解と協力体制の必要性も痛感しました。

沿線地域や防災の専門家の皆さんと鉄道における防災・減災に向けて、問題を共有化

これらの「現地踏査」で明らかになった問題点の改善に向けて、JR東労組として提言をまとめ、沿線地域や防災の専門家の皆さんと問題点を共有化していくために「防災・減災フォーラム」を開催してきました。

最近では、神城断層地震から1年を迎えた昨年11月14日にJR東労組長野地方本部がシンポジウムを開催し、土砂崩壊した大糸線の「現地踏査」から見た問題点を現場組合員が提言を行いました。また、白馬村小谷村長や地域の消防団の皆さん、防災の専門家などが参加してパネルディスカッションを行い、地域行政と連携を深めて、災害に強い地域と鉄道を創り出していくことを議論してきました。



JR 東労組長野地方本部が開催した「防災・減災シンポジウム」

今後も防災士の資格取得を通じて現場に「防災のプロ」を育成し、労働組合の立場から「災害から命を守る鉄道」をめざして、取り組みを推し進めていきます。



現地踏査で高台から横須賀線逗子駅を臨む

東日本大震災から学んだこと——命を守るために、自ら現場で判断し行動したこと

東日本大震災では、東日本エリアの運転中の列車が大地震によつて緊急停車し、沿岸部の路線では高台への避難誘導が行われました。その結果、多くの沿岸部の線路が被災しましたが、東日本エリアでの営業列車の乗客と社員の死傷者はいませんでした。

実際に避難・誘導した乗務員からは「マニュアルに指定された学校ではなく、より高台にある避難箇所へ避難した」「緊急停車した場所が指定された避難場所より高地とわかり、その場に留まった」「現地を良く知る乗客からアドバイス

された」と証言しています。これらの事実から、私たちが東日本大震災から学んだことは「現場で一人ひとりが自ら判断して行動したこと、多くの命が助かったこと」です。したがって、今後起こり得る大災害に對して何を備えるべきかと言えば「一人ひとりの主体性」だということです。防災・減災の取り組みは、他人や企業に任せるだけでは、乗客の命を守ることはできません。現場最前線の人々が自ら考えて最善を尽くすためには、現場からの取り組みがとても重要です。

その後、JR東労組本部として

労働組合として「防災のプロ」の育成をめざし、161名が防災士資格を取得

Japan Bousaisi Organization
防災士 防災士10万人記念号
REPORT 2016

全国に防災士は105,146名

東京支部の取組
高知県 福岡県福岡市
東京都 東北福祉大学
大分県 日本労働組合連合会
徳島県 日本防災士会・支部活動
防災士の活動 新聞報道・論説

日本防災士機構

防災士の現場

労働組合の取り組み…JR東労組（東日本旅客鉄道労働組合）

日本防災士機構が発行する冊子に取上げられました！

